

Wiggins先生のトビケラ調査に同行して

西村 登

1988年5月24～26日、カナダの王立オンタリオ博物館昆虫学部門学芸部長であり、トロント大学動物学教室教授でもあるGlenn B. Wiggins博士が夫人同伴で来日された。関東・関西・北海道などで調査をされる日程の一部をさいて、円山川にも足を延ばされ、拙宅を訪ねてくださった。

Wiggins先生は、トビケラ目研究の世界的権威で、成虫だけでなく幼虫にも着目され、系統分類・生物地理・生態に関する多数の論著がある。なかでも1977年に発表された見事な解説図入りのモノグラフ「北米産トビケラ幼虫」(PP.401)

“Larvae of the North American Caddisfly Genera (Trichoptera)”は、あまりにも有名である。

先生は円山川では、とくに私が長年つきあっているヒゲナガカワトビケラ科の蛹の採集と、同成虫の夕方の遡上飛行のようすを観察したいとのご希望であった。

24日は円山川支流八木川の上流・関宮付近で、25日は同支流横川上流や氷ノ山(1510m)頂上付近のブナ林内小流で、26日は八木川上流や鉢高原の湿地や林内小流で調査や採集をされた。また24日と25日は朝からの調査に引き続き、灯火採集を午後9時過ぎまで精力的にこなされた。

先生ご夫妻来但中の3日間、大阪府大の谷田一三博士がわざわざ同行され英会話のできない私を助けてくださったし、25日は兵庫陸水生物研究会の河浪繁さんや湯浅義明さんらも研究成果を携えて参加してくださった。また、25日は関宮町役場がジープを貸してくださり、私たちの娘のパートナーである檀博之君が終日運転し、急坂の山道を往復してくれた。当日は妻も同行し、生まれて初めて氷ノ山の頂上へ登った。

一番心配だった天候は、24日曇り、25日薄曇り、26日晴れで、大変ありがたかった。円山川上流域各地での調査では、トビケラ類成虫・幼虫・蛹などの採集成績もまずまずの成果でひとまず安心した。ただ、ヒゲナガカワトビケラの飛翔は、群飛は観察できたが、遡上飛行は羽化のピークが過ぎていたため飛行数が著しく少なく、あのダイナミックな集団飛行のようすを先生に見てもらえず心残りであった。

3日間、先生ご夫妻、谷田博士のお供をして感じたこと、教えられたことは極めて多い。とくに強く印象づけられたことは、先生の旺盛な好奇心と鋭い観察力、あくなき探求心、そしてその持続力である。先生は腰までの長靴を履き、膝を折り曲げて、顔は水面にくっつくかと思われるくらいまで、水に接近させて、水中を探られる。そして充分観察された後、1個体ずつ注意深く採集され、小バットの中で泳がせながら、さらに細かく観察されてから、はじめて小びんに収納される。そして、調査に行かれる先で、私などの目につかない種類をつぎつぎに見つけられる。例えば氷ノ山頂上付近のブナ林内小流では、水中の小石に付着しているフジウロコゴケのなかでヒメトビケラ科の1種（伊藤富子さんが北海道で見出された新種、カメノコヒメトビケラの近縁種）の幼虫を多数見つけられ、一行を驚かせた。このグループは、現在北海道在住のトビケラ学者、伊藤富子博士が熱心に探し求めておられるものだ。このように、先生の眼力はまことに鋭く、私から見るとまるで魔術師のようであった。また、同じ種類の幼虫でも成虫でも、かなり多くの個体を丹念に探してくり返し採集される。したがって一か所に腰をすえると、なかなか動かない。まさにトビケラにとりつかれた執念の鬼とでも言おうか。

先生の好奇心の大きさ、観察力の鋭さ、持続力のたくましさなどと私のそれとを比べると、私などとても足元にも寄れない。私が見るとごく平凡にしかみえない生物の世界も、先生が見られると魅力尽きないすばらしい生命の躍動する空間に変貌してしまう。私は何と明き盲だったのだろう。

注意深く、根気強く観察すれば、私たちの身近には、例えば小流とか湿原とか、小川や池とか、新鮮な未知の世界がいくつもあり、われわれの解明を待っていてくれるのだ（しかし、それはいま急がねばならない。開発とか、地域の活性化という名のもとに、次々と消し去られようとしているのだから）・・・と、つくづく痛感させられたし、近ごろの私の怠慢を強く反省させられ、大きなインパクトを受けた3日間であった。